

聖書：ルカ 22：63～71

説教題：神の子ですか

日時：2013年1月27日

イエス様は今日の箇所です。ユダヤ人による裁判を受けます。他の福音書を参考にすると、イエス様はローマ総督ピラトのもとに連れて行かれる前に3回の裁判を受けたようです。1回目は前大祭司アンナスの前での尋問、2回目は当時の大祭司カヤパの前での尋問、そして3回目が今、開いている箇所に記されているユダヤの最高議会サンヘドリンにおける正式裁判です。66節に「夜が明けると」とありますが、ユダヤの法律では最高議会は夜には開かれないことになっていました。そこでそれ以前に2回の私的な裁判が行われ、ついに夜が明けたこの後、ユダヤの最高議会が開かれたのです。63～65節には、イエス様がひどい扱いを受けられたことが記されています。イエス様を監視していた人たちは、イエス様をからかったり、むちで叩いたり、目隠しをして「誰がたたいたかを言い当ててみる！」ともてあそんだり、様々な悪口を浴びせました。全体の雰囲気からして、この人がさばかれるのはもう決まりだとして取った監視人どもは、したい放題のことをしたのでしょう。もし私たちがイエス様の立場にあつたら、とても耐えられないようなみじめな仕打ちをイエス様は受けられたのです。こんな中でイエス様は前回見たように、鶏が鳴いた時にペテロのことを思い、振り向いて彼を見つめてくださったのです。後にもう一度触れますが、63～65節のイエス様の姿は私たちの罪をその身に背負ってくださるためのものでした。イエス様の身代わりは十字架の死だけではなく、そこに至るまでのすべての苦しみも、私たちの罪を担うためのものでした。イザヤ書53章4節：「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。」

さて、夜が明けてイエス様はサンヘドリンの正式裁判へ連れて行かれます。そこでまず彼らがイエス様に問うた問いはこれです。「あなたがキリストなら、そうだといいなさい。」キリストとはヘブル語のメシヤに当たり、その意味は「油注がれた者」ということです。そしてこのメシヤは、ダビデの家に神がやがて与えると約束されたまことの王と結びついて考えられていました。つまりイエス様をご自分をキリストだと証言するなら、それはご自分をユダヤ人の王だと主張することになる。それならローマ帝国に謀反を企てる反逆者だと訴えることができる。23章2節：「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」

その問いに対してイエス様は答えられます。67節後半～68節：「しかしイエスは言われた。『わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょうし、わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。』」イエス様はここで彼らに答えることを拒否しています。もし彼らが本当に誠実に問うているなら、イエス様はきちんとお答えになりますし、逆にイエス様から質問をして、その人々を正しく導こうともされるでしょう。しかし彼らは最初からイエス様を断罪するという結論を決めています。そんな人に何かを話したり、問うたりしても、何の意味があるのでしょうか。しかしイエス様は一つのことだけを述べます。69節：「しかし今か

ら後、人の子は、神の大能の右の座に着きます。」 昔、王たちは補佐役を立て、その者にご自身の右という栄光の座を与え、その人に国の支配と統治の務めを任せました。イエス様はそのように間もなく神の右の座に着座し、一切の権威と支配を委ねられて、この世界をさばく方となられるのです。つまりイエス様が言っていることは、今はあなたがたがわたしをさばくような格好になっているが、その立場は間もなく逆になるということです。彼らは今、イエス様を問い詰め、イエス様を断罪しようとしています。本当の意味で問われているのは彼らなのです。真の裁判官の前に立っているのは彼らなのです。

しかし彼らは今の言葉は到底受け入れられない言葉、聞くに堪えない言葉として、憤ります。イエス様は 69 節で「人の子」という言葉を使われました。これはイエス様のご自身を指す際に好んで用いた言葉です。この言葉は、それだけを見つめれば、人間の誰にでも当てはまります。すべての人は人間の子、人の子です。しかしこれは旧約聖書の重要な箇所に使われている言葉でもありました。ダニエル書 7 章 13～14 節：「私がまた、夜の幻を見ていて、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」イエス様はまさにそのダニエル書の預言を思い起こさせるような仕方、ご自分を指して「人の子」と言われました。これは自分を神に等しい者とするともない発言ではないか。恐ろしい冒瀆的発言ではないのか。そこで彼らはその意味をはっきりさせるために、みなで再度問います。「ではあなたは神の子ですか。」

それに対してイエス様は答えられました。70 節後半：「すると、イエスは彼らに『あなたがたの言うとおり、わたしはそれです』と言われた。」 この原文をそのまま訳すとこうなります。「あなたがたが言いました。わたしがそれである、と。」 新改訳の訳だと、「わたしそれです」というイエス様の肯定的な答えが文章の中心にあって、そこに「あなたがたもそう言っている」というサンヘドリンの人たちの言葉が添えられているという意味に読めます。しかし原文から分かることは、厳密に言えば、イエス様はご自分としての答えは述べておられないということです。「あなたがたがそう言った」と言っているだけです。もちろんイエス様がそのことを否定していないという意味では、イエス様もこの言葉を承認していると言えます。しかしイエス様が焦点を合わせていることは、彼らは何と言ったか、ということです。新共同訳聖書ではこう訳されています。「そこで皆の者が、『では、おまえは神の子か』と言うと、イエスは言われた。『わたしがそうだとは、あなたたちが言っている。』」

議会のメンバーからすればどうでしょう。「何をばかなことを言っているか。オレたちがどのように告白したのではない。オレたちはただ聞いているだけだ。誰がおまえなんかを神の子であるなどと認めるか。」 そう考えたでしょう。しかし、「イエスは神の子」との告白を口にすべきは人間です。イエス様はご自分から「わたしは神の子だ」と語ったことはありません。かつて 12 弟子に対しても、イエス様は「あなたがたはわたしをだれだと言いますか」と問われました。そしてペテロが 12 弟子を代表して「あなたは生ける神の御子キリストです」と答

えた時、それは天の父があなたに示したことだと言って、大変喜ばれました。イエス様はご自身を見る人々が、誰かに強制されたり、押し付けられてではなく、自分から「あなたは神の子です」と告白することを求めておられます。そのまさに大切なイエス様の本質を言い当てた言葉を、このサンヘドリンのメンバーたちが自分の口から出した。その言葉を正しい意味で告白する人は、永遠の命の救いに生きることができます。しかし彼らはどうだったのでしょうか。彼らはイエス様が「あなたがたがそのことを言いました」と言った直後に、それを否定し、言いました。「これでもまだ証人が必要でしょうか。私たち自身が彼の口から直接それを聞いたのだから」と。これは信じられない冒涇だ！神でもないのに、自分を神だと言った！あ～恐ろしい！もはやこれ以上の証言は不要である！そう言って彼らは立ち上がって、次の 23 章でイエス様をピラトのもとへ連れて行くのです。先ほどのイエスは「神の子」という真理を彼ら自身が自分の口から語ったということも皮肉的ですが、71 節の言葉も皮肉的と言われます。彼らは「もう証人はいない。我々は彼の口から直接それを聞いたのだから」と言いましたが、確かにそうです。私たちはここに、イエス様ご自身が実質上、ご自身を神であるとはっきりあかしなさった言葉を持っています。その言葉によく耳を澄まして聞くなら、もう他に証言はいらない。ここにイエス様によるイエス様についての重要な証言があるのです。

さて私たちはどう告白する者でしょうか。イエス様が神の子であることはずっとこの福音書に示されて来ました。1 章 32 節：「その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。」 3 章 22 節：「あなたは、わたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」 9 章 35 節：「これは、わたしの愛する子。わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。」 その他、イエス様の語る言葉、また行なうみわざに、イエス様の本質が神であること、そこにおられたのは人の性質を取ってこの世に来られた神ご自身であることが示されて来ました。もし私たちがその告白をもって今日の箇所を見るなら、ここには信じられないようなことが記されていることに改めて驚かずにいられません。63～65 節で監視人どもからひどい仕打ちを受けておられたのは誰だったのか。それは神ご自身であった。そこでからかわれ、むちでたたかれ、目隠しをされ、悪口を浴びせられたのは誰だったのか。それは聖なる聖なる神の御子であった。なぜ神がこんな目に会わなくてはならなかったのか。それは私たちの救いのためです。神であるイエス様は私たちを救うために、このような辱めをも甘んじて受け、耐えてくださいました。すべての人は罪人なので、誰も他の人の救い主になることはできません。そのような罪人たちを限りなく救い出すためには、神の子である方がご自分を無にして、多くの人々の罪の呪いをみな、その身に引き受けて苦しむより他に道はなかったのです。そのために神であるお方が人となってこの世に来てくださり、ここまでの低い生涯を送ってくださり、さらにここに記されているような耐えがたい辱めと苦しみを受けてくださった。そしてさらにこれから、もっと卑しく、もっと惨めな十字架の死にまで進んでくださる。何ということでしょうか！私たちはここに世界に唯一の神の本当の姿を見つめて礼拝しなければなりません。

しかしこの方はいつまでもこの状態なのではありません。69 節で言われた通り、栄光に満ちたやがての日が来ます。十字架と復活を経て、私たちを救うためのすべてのみわざを成し遂げた方として、イエス様は神の右の座に着座されます。そして父なる神から全権を委ねられた

方として、最後のさばきの日には一人一人を最終的にさばかれます。私たちはその方のさばきの前で、何と答える者でしょうか。問われるのは私たちなのです。今日の箇所では人間がイエス様を好きなようにさばいているように見えますが、本当の意味でさばかれるのは私たちなのです。イエスは神の子との正しい答えをせっかく口にしながら、それを否定し、捨て去ってしまうのではなく、この言葉の意味を良く思い巡らしながら、私たちはイエス様を告白したいと思います。監視人どもの下でからかわれ、ひどいあざけりを受けられたのは聖なる神の御子です。サンヘドリンにおける裁判で、上から見下され、侮辱的判決を受けたのは神の御子なるお方です。神であるお方が、私たちのためにへりくだり、身を低くして、耐えられないような苦しみと辱めをじっと黙って甘んじて受けてくださいました。そうして私たちに永遠の命に至る確実な救いを備えてくださった。私たちはこの神の御子の前にひれ伏して感謝の礼拝をささげ、この方によって救いを頂き、かの日にはこの私たちの救い主によって栄光へ導き入れられる歩みへ進みたいと思います。